表紙

KYOTO AYABE KOYA AtoZ

水源の里 古屋 AtoZ

「水源の里 古屋 AtoZ」

発行日　2020年2月28日

製作　京都産業大学現代社会学部滋野ゼミ
谷口 優大
中岡 優芽
水島 遥
吉田 匠

協力　水源の里 古屋
古屋でがんばろう会
滋野 浩毅（京都産業大学現代社会学部教授）
塩見 直紀
（半農半X研究所、福知山公立大学准教授、総務省地域力創造アドバイザー）
水田 ウタコ

発行　あやべ水源の里連絡協議会
（綾部市役所定住・地域政策課 上林いきいきセンター）
京都府綾部市八津合町上荒木 5
TEL　0773-54-0095
MAIL teijyutiiki@city.ayabe.lg.jp
HP　https://www.city.ayabe.lg.jp/

あやべ水源の里　Facebook ページ

水源の里の「今」をお届け。
イベント情報や水源の里の四季をどこよりも早くお伝えします。

古屋でがんばろう会　Facebook ページ

自主応援組織「古屋でがんばろう会」の活動の様子や
行事予定などをお伝えします。

MESSAGE

この冊子は古屋に住む人々の想いや風土、日々の生活が見える唯一無二の集落の名刺になってくれることを願い、作成しました。

一般的には「限界集落」と呼ばれる古屋ではありますが、日々チャレンジしていく古屋の姿は、決して“限界”という言葉に当てはめてはいけないくらいの、強さや熱さがありました。

『古屋 A toZ』を手に取っていただき、実際に訪れ、私たちが感じたことと同じ想いに共感していただけたら幸いです。

この冊子を作るにあたって、ご協力いただいた古屋の皆さま、綾部市職員の方、デザイナーの水田ウタコ様、総合地球環境学研究所の三村豊様他、多数の方々に感謝を申し上げます。

ABOUT

古くは丹後から京都へと通ずる旧京街道沿いの集落として、また戦後は林業で栄えた古屋。現在は住民3世帯4人のみとなってしまいましたが、みんな元気に暮らしています。また、集落を自主的に応援する組織「古屋でがんばろう会」の人たちが、道普請やトチの木調査、シカよけネット張り、トチの実拾い、雪かきにと駆けつけ、集落を盛り立てています。おばあちゃんたちが丹精込めて作るとち餅やあられ、おかきは古屋の味。おばあちゃんとともに多くの根強いファンがいます。
2019 年には、古屋で創作活動をされている染色作家の松本健宏さんが、古屋の風景を表現した 16 枚綴りの屏風を、10 年かけて完成させました。

水源の里 古屋
人口 4 人　3 世帯
2020年 2 月現在

春 サクラ、トチの花、クリンソウ…長い冬を耐え、花が咲きほこる古屋の春はひときわ穏やかで鮮やかです。

夏 梅雨が明け、庚申さんの夏まつりで始まる古屋の夏。いっぱいの水を含んだ古屋の山々にはトチの木が大きな葉をつけ、谷水が集落に恵みをもたらします。

秋 トチの実拾いから始まる古屋の秋は、庚申さんの秋まつり、紅葉で真っ赤に染まる山々の風景へと徐々に深まっていきます。

冬 山々の木々が葉を落とすと、深い雪に閉ざされる古屋の冬。モノトーンの風景は水墨画の世界のようです。

contents

A azayaka 鮮やか
B volunteer ボランティア
C challenge チャレンジ
D doubutsu 動物
E energy エネルギー
F forever フォーエバー
G gakko 学校
H hozonshoku 保存食
I ishigaki 石垣
J jikyujisoku 自給自足
K koshinsan 庚申さん
L love ラブ
M momo san モーモーさん
N name 家紋
O on air オン・エア
P pride プライド
Q quality of life クォリティ　オブ　ライフ
R bike ride バイク
S sekibutsu 石仏
T tochi no mori 栃の森
U sumiyaki 炭焼き
V value 価値
W warai 笑い
X obaachan X tochinomi おばあちゃん X トチの実
Y yoho 養蜂
Z zenzai ぜんざい

鮮やか

古屋の自然は四季折々だ。夏は涼しく、秋は山一面の紅葉が見るものの心を熱くさせる。時代の流れはめまぐるしいが、古屋の山は様々な顔を見せてくれる。
人と自然がうまく調和することが、元気の源に繋がるのではないか。
(写真は京都府準絶滅危惧種のクリンソウ。京都北部で最大の群生地)

ボランティア

ここ古屋は、定住しているおばあちゃんたちだけでなく、自主応援組織「古屋でがんばろう会」をはじめとする、多くのボランティアの協力によって守られている。
トチの実拾いやシカよけネットの整備、トチの木調査、雪かきなど、1年を通じて古屋にやってくるボランティアの数は、年間約700人にものぼる。

チャレンジ

10年程前からトチの実を使った製品づくりに取り組んでおり、とち餅・おかき・焼酎・あられ、クッキーの製造を行っている。
また、養蜂で採れたハチミツは、クッキーに使われていて、砂糖とは違った甘みがあり、トチの実の香ばしい香りを感じることができる。

動物

おばあちゃんたちによると、子供の頃、家で牛やニワトリを飼ったり、手作りの罠を仕掛け、ウサギを捕まえて食べていたという。
現在では、シカなどによってトチの実が食べられたり、育てた野菜をサルに荒らされるなどの獣害に困らされている。

エネルギー

昔、電気を起こし、米を搗くために水車を2つ建てた。
しかし、昭和28年の豪雨ですべて流れてしまった。おばあちゃんの庭も流れてしまったそう。
自然は時には私たちを潤してくれるが、時には牙を向くことを肌で感じた。

フォーエバー

現在、古屋の人口は4人であり、普通に考えると集落の伝統をこの先受け継いでいくことは困難である。
しかし私たち学生や古屋でがんばろう会の方たちが協力して、永久に受け継いでいく策をこれからも考え続けていきたい。

学校

おばあちゃんとの話の中で一番多かったのが、小学校の帰り道のこと。
家までの帰り道に魚を釣り、動物たちと出会い、アケビなどを採っていた。冬は雪が2メートルほど積もるので、学校近くの寄宿舎に泊まっていたという。
昨日のことのように思い出話を語ってくれた。
古屋を訪れ、思い出話に耳を傾けるのはどうだろうか。

保存食

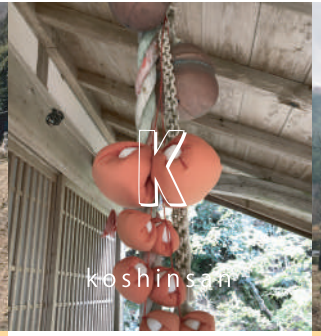
昔から冬場をしのぐために、様々な保存食を作っていた。トチの実の加工食品もそのひとつ。
みそや醤油も自分たちの手で作っていたそうだ。
夏は外で仕事を行い、冬は保存食を作るという習慣が、今の古屋を形成している。

石垣

山に入る道中のそこかしこに、石垣を見ることができる。昔そこに田畑があった痕跡だ。
現在は、木々が生い茂り、往時を偲ぶことは難しい。しかし、苔むした石垣を目の当たりにすると、過去と現在が混在している感覚を覚える。

自給自足

今は全てが自給自足ではないが、昔古屋では自給自足の生活を送っていた。
ウサギを捕まえたり、魚を釣ったり、ニワトリを飼ったり、畑や田んぼを耕したりして生活していたという。
古屋に行ってスローライフを体験するのも良いのではないだろうか。



庚申さん

全国には庚申信仰に関する寺社はいくつもある。その中でも古屋の庚申神社は珍しい。
神仏混合のなごりで、柏手を打って般若心経を唱えるのだが、あまり他では行われていないそうだ。
ここでは60年に一度ご開帳が催される。庚申神社の祭りが年2回夏と秋に行われるのだが、その祭りを行うことが古屋存続の証だと、渡邉自治会長は話す。

ラブ

おばあちゃんたちから話を聞いていると、古屋に対する熱い想いが伝わってくる。
私たちも古屋を散策したり、トチの実に触れていくと、古屋の自然や歴史、トチの実の伝統についてわかってきた。
地元を愛するとは、まさにこの事であろう。

モーモーさん

集落の奥にある山に分け入っていくと、小さな谷水の水源が現れる。
そこは古屋では「モーモーさん」と言われ、大切にされている。
「モーモーさんお水を頂きます」と言ってから頂くのが、昔から古屋の習わし。神様と言われているが、実際なぜ「モーモーさん」と言われているかは不明である。

家紋

私たちが調査のために集落に入ったとき、民家の屋根に家紋があるのを見つけた。
話を聞くと、昔はふとんや提灯、番傘にも家紋が描かれていたという。
家紋を見ればどこの家の誰々というのが分かるという意味合いがあり、家紋一つひとつにその家の歴史があるのだろう。

オン・エア

古屋は今、全国から注目されている。そのひとつとして、テレビ放送で度々紹介されていることがある。
そのオン・エアを見て古屋に訪れる人、トチの実の加工品を注文する人と、古屋のファンは放送される度に増えている。
これからもますます注目され、ファンが増えていくことだろう。

プライド

昔古屋は、丹後と京を結ぶ京街道沿いにあり、江戸時代には参勤交代における大名行列の通り道であった。そのため、多くの人の往来があったという。
また、平安時代から武士が住み着いており、武士の子孫である古屋の住民は、プライドが高い人が多かったそう。そこから古屋の伝統に対する誇りを感じることができた。

クォリティオブライフ

おばあちゃんたちは、ほぼ毎日公民館でトチの実の皮をむいたり、とち餅やおかきを作ったりと、忙しく働いている。
また古屋にやってくる人たちとの交流にも積極的だ。
仕事があること、そして人と話す機会があることが、長生きの秘訣なのだろう。

バイク

おばあちゃんたちの公民館や市街地への移動手段は、バイクである。
90歳を越えてもなお、険しく細い山道をバイクで走ると聞いたとき、パワフルだなと心から感じた。
古屋に行く道中には、おばあちゃんたちがバイクに乗っている事を示す看板も設置されている。

石仏

古屋の集落や山の中の随所にみられるお地蔵さん。
戦国時代、丹波を治めていた明智光秀が道しるべとして安置したという説も。
普通、石仏は地面に置かれるが、古屋では祠を建て、地上から高いところに祀られている。
今は山の守り神さまとして、山に入るときは、必ずここで安全祈願をしていくことになっている。

栃の森

古屋の森を象徴する栃の木の群生。推定樹齢千年の巨大な栃の木をはじめとし、現在789本もの栃の木が確認されている。
未確認のものも合わせると、およそ1500本もの栃の木があると思われる。
日本有数の栃の木の群生地である古屋は、2016年(平成28年)京都丹波高原国定公園に指定されている。

炭焼き

私たちは炭焼きの窯跡を探しに、白石原まで歩いた。
かつては、ここでナラやクヌギなどの木を焼いて炭を作っていたそう。昔はこの炭を売って生計を立てていたと聞いた。
(写真は昔炭焼きが行われていた窯の場所である)

価値

トチの木、その実を利用して作られるとち餅やおかき、クッキー、焼酎などの加工品。古屋に関わるボランティアの人々。そしてとち餅などを作ってきたおばあちゃんたち。
それぞれが関わりあって今の古屋があり、何物にも代えがたい価値がある。
(写真はトチの実の皮をむく〈栃へし〉。栗の木で作られ、江戸時代からのものも使われている)

笑い

古屋に来て、おばあちゃんたちと話をしていると、自然と笑いが起こる。おばあちゃんたちの掛け合いも面白く、話を聞いていると漫才のようで、こちらも笑ってしまう。
長寿の秘訣は、この笑顔の絶えない生活にあるのかもしれない。

おばあちゃんXトチの実

古屋のおばあちゃんたちが、トチの実を加工するということは昔から変わっていないが、目的は変わっている。
昔は生きるため、生活のためであったが、現在は、古屋のとち餅やおかき、あられなどを求めている全国の人たちのために、心を込めて作っている。
トチの実には、ポリフェノールがいっぱい。おばあちゃんたちの肌が、つるつるなのもうなずける。

養蜂

自治会長である渡邊さんから伺った話では、以前トチの実があまり採れない時期があり、受粉していないのではないかと考えた。そこで、養蜂組合にミツバチを使って、トチの花の蜜を吸う養蜂を頼んだ。それから平均してトチの実が採れるようになったという。
トチの花の蜜は、さらっとしているが、糖度が高い。一般的なハチミツよりも高価だが、それも納得のいく味だ。

ぜんざい

フィールドワークで、古屋公民館を訪れ、おばあちゃんたちの話を聞いているとき、必ずとち餅ぜんざいを振舞ってくれる。
もち米だけでついた餅のぜんざいよりも、とち餅の方が、トチの実の香ばしさが引き立って一味違った美味しさ。絶品である。
とち餅ぜんざいは、いくらでも入るので、食べ過ぎにはご用心!(笑)

こぼれ話
栃神伝説

むかしむかし、古屋村に大飢饉があったそうな。村を救うために我が身を神様に捧げようとした少女。そこに現れたのは〝栃神さま〟。
少女は、トチの実の食べ方を教えてもらい、村は救われ、それから村は飢えで苦しむことはなくなった。栃神さまに感謝した村人たちは、トチの実の食べ方をいろんな村に伝えていったそうな。

MEMBER

岩崎 キクノさん

古屋は自然が豊かで、気楽に暮らせるのが良いところ。こんな山奥にも、町の子たちが来てくれることがうれしい。笑顔を受け取れた。ここにおるもんが「自分たちで生きていく」という心が大事やな。

渡邉 ふじ子さん

家にいてもぼーっとするだけやけど、公民館に来ると仕事もできるし、人と話せるのがいい。古屋の存在を多くの人に知ってもらい、水源の里を絶やさないようにしたい。また、景色も良いし、ボランティアの人がたくさん来てくれて、若い人といろいろな話ができて楽しいです。

細見 恵美子さん

古屋の良いところ…全部良いけど、四季の移り変わり、特に秋はものすごくきれいです。ここにしかない景色やと思います。これから、この村を守ってくれる人、この後を継いでくれる人がいたらうれしい。今はたくさんの人が来てくれてありがたいと思っています。

渡邉 和重さん

古屋の私たちは、この少人数集落を、廃村にしないために頑張っています。こんな小さな集落にも大きな可能性がある。それには何事にも諦めない事が大事だと思います。自然の豊かさ、おばちゃんたちのがんばり、そして行政やボランティアの皆さんに感謝です。

谷口 優大（京都産業大学滋野ゼミ）
私の地元の村も人口が少ないのですが、ここまで人口が少ない村に入るのは古屋が初めてでした。話を聞いたり、散策をしているうちに古屋の魅力をたくさん見つけることができ、色んなことが経験できた『ＡｔｏＺ』の冊子作製でした。古屋の魅力を沢山盛り込んだので、この冊子を多くの人に見ていただきたいです。

中岡 優芽（京都産業大学滋野ゼミ）
私は京都が地元ですが、これまで綾部にはほとんど来たことがありませんでした。
初めて古屋を訪れたとき、私の住んでいる地域と全然違い、緑豊かでとても静かで驚きました。私と同じような体験を、古屋に来て感じていただけたらと思います。

水島 遥（京都産業大学滋野ゼミ）
はじめて古屋を訪れたときは、納得のいく『AtoZ』が完成するか不安でした。古屋の自然に触れ、４人の方からお話を聞いていくうちに、AからZまでの26に収まり切らないほどの魅力を発見できました。この冊子を手に取った方、古屋に足を運んでみてはいかがでしょうか？

吉田 匠（京都産業大学滋野ゼミ）
古屋のおばあちゃんからたくさんの昔話、古屋の歴史、生活の話を聞いた。
何度かトチの実の加工品を作る手伝いもした。このようなことを行っていくうちに、心からこの価値のある古屋という地域を、途絶えさせてはいけないと感じることが出来た初めての地域になりました。

滋野 浩毅（京都産業大学教員）
今回の『ＡｔｏＺ』作成はまさに「山あり谷あり」。いろいろなことがありました。最初は戸惑うことも多かったですが、いったん取り組み出すと、キーワードが「26では全然足りない」ということに。『古屋ＡｔｏＺ』は、集落紹介の「ほんの入り口」です。この冊子を手に、ぜひ古屋にお越しください！